

「平和の炎賞」授与式

一般財団法人 坂本龍馬財団理事 右城 猛

1. まえがき

今年の4月13日、ウィーンで活躍中のオペラ歌手 示野由香さんとパートナーのディーター・パッシングさんが、高知県民文化ホール オレンジで「お龍と龍馬 愛の賛歌」のオペラを上演した。高知県立坂本龍馬記念館の学芸員の前田由紀枝さんが、森健志郎館長の思いを脚本化した歌劇である。予想を上回る人気を博した。

坂本龍馬は幕末の時代に、「自由と平等と平和」に命を賭け、日本を世界に開ききっかけをつくった。このことを、オーストリアの名家 ハプスブルク家が主宰する平和団体「平和の炎」の設立者で理事長のヘルタ・マルガレーテ・ハプスブルク・ロートリンゲンさんに話したところ、坂本龍馬に「平和の炎賞」が授与されることに決まった。

「平和の炎」は2000年に設立され、戦

地の子供たちの支援活動などとともに、2008年から世界平和に功績のあった個人・団体に「平和の炎賞」を贈って顕彰している。

5月15日(木)にウィーンで開催される授与式に、日本からは高知県立坂本龍馬記念館の森健志郎館長を含む16名が出席することになった。坂本家九代目当主の坂本登氏と武内ともこさんの二人は東京、阿部直美さんは北海道、その他の13名は高知県人である。この中には、尾崎正直知事の特命を受けた高知県文化生活部の原哲副部長もいた。

出発は、5月12日(月)。羽田国際空港11時25分発のNH-223便でフランクフルトに向かい、そこで乗り継いで19時20分にウィーン国際空港に通着。13日は、オーストリア日本大使館を訪問し、ウィーン市内観光とオペラ鑑賞、14日は郊外のメルク修



写真 1 シェーンブル宮殿

道院見学とドナウ川クルーズの予定である。

ウィーンは、「音楽の都」「芸術の宝庫」。浮き足立つ参加者に、「15日が本番、観光はあくまでも付録ぜよ。このことをくれぐれも忘れんように」と、森館長から釘が刺された。

2.授与式の準備

13日と14日は天候に恵まれたが、本番の15日は朝から雨。授与式の会場は、12日から宿泊しているホテル「ザ・リバンテ パーラメント」のレストランに決まった。

昨日の段階では、まだ、式典のタイムスケジュールがわれわれに知らされていなかった。今朝、初めて、「平和の炎」のヘルタ理事長の秘書をされているシビレさんからの伝言を、示野由佳さんがメモ書きにしたコピーがわたされた。式典はチャリティー方式で行われるようであるが、経験がないわれわれには理解に苦しむ内容であった。



写真 2 9時からレストランで打ち合わせ

9時、打合せのために森館長、坂本さん、前田さん、竹内さん、原さん、阿部さん、それに私の7名がホテルのレストランに集合したが、式典を企画した関係者が誰一人いないのでメモ書きの問題点を確認するだけに終わった。

「主役になりたい者ばかりで、世話役が一人もおらん」森館長のこの発言は、真に的を射ていると思った。

司会役の山本真千さんと連絡がとれ、16時から再度打合せをすることになった。

山本真千さんは、大阪の出身。若い美人の独身女性。「おかんサービス。真心と共に参上します！ 通訳&翻訳」と名詞に書かれていた。目指していたオペラ歌手を諦めて、通訳やイベントプロデューサーを商売にしているようである。頭の切れが抜群によりやり手女性であると一目でわかった。

山本さんがシビレさんに話す言葉は、機関銃のように早く威圧感のあるドイツ語。何を話していたのかさっぱりわからなかったが、私たちの提案が100%受け入れられたことを知り、ホットした。顔は上品だが、さすがは関西人。押しが強い。



写真 3 森直樹・明美ご夫妻。



写真 4 左より、片岡、中野、前田、武内さん。



写真 5 筆者と家内

日本からの参加者は、全員がドレスアップして、開会の1時間前の18時にロビーに集合。お互いが写真を取りあっていた。

東京から参加された武内ともこさんから、「緊張しているのが顔に表れているよ」と指摘された。羽田に帰って彼女からいただいた名刺を見ると、「一般社団法人終括カウンセラー協会 上級終活カウンセラー」の肩書きが、名刺の裏には「産業カウンセラー、心理相談員、DV カウンセラー」の資格が書かれていた。一瞬にして、私の心理状態を見破ったのであろう。しかし、武内さんのこの一言で、随分とリラックスできた。

3. 「平和の炎賞」授与式



写真 6 並んで歓談されるヘルタ理事長と森館長

16時30分、開場時間に合わせて中に入ると、「平和の炎」のヘルタ理事長ご夫妻や森健志郎館長は、ひな壇というべき所定の位置に立ち、すでに歓談をされていた。

示野由佳さんが私たち夫婦をヘルタ理事長ご夫妻に紹介してくれたので、挨拶をさせていただいた。

ハプスブルク家と言えば日本の天皇家のような存在。とても近くで話しなどできないと思っていただけに感激した。フランクでフレンドリーなのには驚いた。

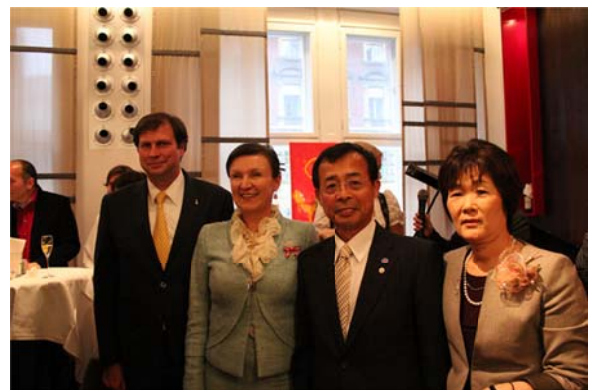


写真 7 ヘルタ理事長に挨拶し、記念撮影



写真 8 式が始まるまで、ドリンクを飲みながら歓談



写真 9 森館長、右城、阿部、竹内、小川ご夫妻

19時開式。参加者は約80名。2日間観光ガイドをしてくれた千竈(ちかま)さんも約束通り来てくれた。

最初に1分間、平和の祈りを捧げる。こちらの式典の習わしのようなのである。司会の山本真千さんが式典の趣旨を紹介したあと、森健志郎館長が、15名の仲間と共に日本から来たという挨拶をされた。



写真 10 森直樹社長、竹内夫人、森夫人



写真 12 示野由佳さんの挨拶



写真 11 挨拶をする森健志郎館長



写真 13 司会の山本真千さん

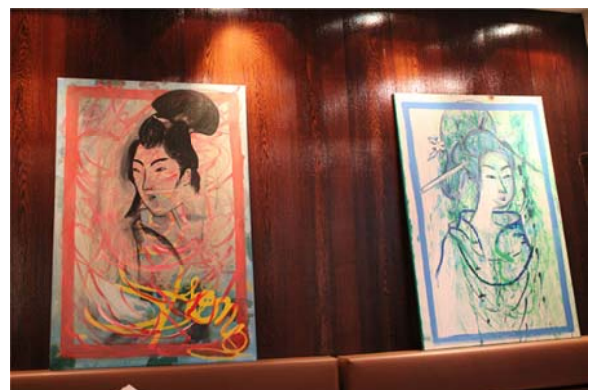


写真 14 会場に展示された絵画

このような授与式を日本ですれば、一人3,000～5,000 円の参加費を徴収しなければ、会場費や料理代金を賄うことができない。ところが、参加費は無料であった。スポンサーからの協力金、チャリティー福引きから得た収入などで賄われたようである。

会場には、現代絵画、絨毯、花瓶などの工芸品が展示されていた。授与式の後には、民族衣装などのファッションショーがあった。出展者から広告費として徴収しているのだろう。チャリティー福引きとは、参加者の寄付金(10～20 ユーロ)と引き替えに、空くじなしの券を渡すもので、これによっても利益を得ているのだろう。

展示物の紹介があった後、ソプラノ歌手の示野由佳さんとテノール歌手のディーター・パッシング(Dieter Pashing)さんが、「お龍と龍馬 愛の賛歌」を歌った。



写真 15 「お龍と龍馬 愛の賛歌」を熱唱する示野由佳さんとディーター・パッシングさん



写真 16 お二人の熱唱に耳を傾ける参加者



写真 17 授与式で、挨拶をされるヘルタ理事長



写真 18 トロフィーと表彰状が森館長、示野由佳さんに贈られた。トロフィーは、四角い大理石の台の上に、平和の炎を形取った木が取り付けられている。



写真 19 お礼の挨拶をする森健志郎館長。通訳は、振り袖姿をした近藤美香さん(15歳)。愛弓さんの娘さん。



写真 20 お礼の挨拶をする坂本登さん。



写真 21 お礼の挨拶をする筆者。通訳は、ウィーン在住の近藤愛弓(あゆみ)さん。

ウィーンに着いて森館長から、「右城さんは、龍馬財団の事理として、授賞式で挨拶をしてもらうので何か考えといて。話す内容は紙に書いて、通訳の方に事前に渡して」と言われた。まさか授与式でスピーチが出来るとは思ってもしなかった。このような光栄な機会が与えられたのは、第一コンサルタントがチャリティー協力金を出していたことに他ならない。下記の挨拶文を書いて、通訳の近藤愛弓さんにお渡しした。

『皆さん、こんばんは。私は、坂本龍馬財団の理事をしています右城猛でございます。この度は、「平和の炎賞」をいただき、ありがとうございました。日本の奈良や京都には、1000年以上の歴史を持つ仏像や寺院がたくさんあります。ここウィーンには、ゴシックやバロックの素晴らしい建物、世界的価値がある彫刻や絵画があります。人類の財産と言うべき文化遺産を守り、そして後世に遺してゆくためには、世界が平和でなければなりません。私たち坂本龍馬財団は、龍馬が目指した戦争のない平和な社会を守るための活動をしています。その活動が、このような形で評価されましたことに感謝申し上げます。ダンケ シェーン』



写真 22 坂本龍馬記念館から和紙で作られた高知産の名刺入れなどお礼の品物が関係者に配られた。



写真 23 日本大使館を代表して、二等書記官(広報文化班長)の川原剛さんが出席されていた。



写真 24 会場に展示された竹内土佐郎先生の書



写真 25 竹内土佐郎先生からは、自作の書がヘルタ理事長と秘書のシビルさんに贈呈された。



写真 26 森館長の要望に応え、坂本龍馬のポスターにサインするヘルタ理事長



写真 27 副理事長もポスターにサイン



写真 28 「平和の炎」の二人のサインが入ったポスター。高知県立坂本龍馬記念館に宝物が一つ増えた。



写真 29 スポンサー名が入ったTシャツの紹介



写真 33 軍人はヘルタ理事長のお友達



写真 30 チャリティー福引き協力の説明



写真 34 武内ともこさんは場慣れしている



写真 31 参加者の女性に頼まれて、展示されている絨毯
の前で一緒に記念撮影



写真 35 ファッションショー



写真 32 皆さんお疲れ。一休み



写真 36 民族衣装を着てダンスの紹介



写真 37 平和の炎のトロフィーを手にして喜ぶ坂本龍馬財団のメンバー

阿部さんは、2011年の「龍馬とアメリカで発信!ハワイ&ニューヨークアメリカツアー」にも参加されている。そのときに、高知県や坂本龍馬を想って「心をつなごう」の曲を作詞・作曲されている。

式典の最後で、示野由佳さんとディーターが会場のアンコールに応じて、「友よ、人生は生きてみる価値がある」(フランツ・レハール)、「叱られて」(弘田龍太郎)、「ありがとう」(濱口賢策)の3曲を披露した。



写真 38 坂本登さん、森館長は腹ごしらえ



写真 41 アンコールに応じる示野由佳さんとディーター



写真 39 竹内土佐郎先生は白ワインに大満足



写真 42 最後に坂本さんと私を紹介していただいた。



写真 40 北海道北広島市から参加した阿部直美さん



写真 43 ウィーン在住の女性2人と一緒に記念撮影。

写真 43 の右から 2 人目の女性は、ウィーン在住の Dr.Johanna Takako AOKI さん。会場のオーストリア人と話すときに通訳をしていただいた。名刺をいただいたが、ドイツ語なので、博士であること以外はわからない。結婚すると、相手の姓が自分の姓名の前に付くだけのようである。



写真 44 高知県文化生活部の原哲副部長



写真 45 最後に皆さんで記念撮影

4.あとかぎ

「平和の炎賞」受賞記念ツアー・ウィーン 6 日間」への参加は、私にとって極めて貴重な経験となった。

オーストリアは、高知とは文化が全く違う遠い異国と思っていた。しかし、共通点やいろいろな繋がりがあるのに驚かされた。

まずは、オーストリアの国旗である。赤白赤の国旗は、海援隊旗と同じである。

今回の「平和の炎賞」の受賞は、日本では 3 番目になる。2 番目は、前・オーストリア日本大使の岩谷滋雄氏で、奇遇にも岩谷氏は高知県のご出身である。

授与式で通訳をされたウィーン在住の近藤愛弓さんの曾祖父は、坂本龍馬の油絵を最初に描いた人である。会場にも来られていたが、愛弓さんのお父様の近藤常恭氏は、ウィーンで日本製日用品店「NIPPON-YA」を経営されておられる。

5 月 13 日には日本大使館を訪問し、特命全権大使の竹歳誠氏とお会いした。大使は国土交通省の事務次官、内閣官房副長官を歴任された方で、その前には尾崎正直氏(現・高知県知事)の上司であったこともあって、気さくに話をしていただいた。桂浜を訪れたことがあり、「月見をしながら土佐の辛口の酒を飲むのは最高」と話され、とても嬉しい気分になった。

森林率が日本一の高知県は、全国に先駆けて CLT(クロス・ラミネーテッド・ティンバー、直交集成材)の普及に取り組んでいるが、CLT はオーストリアを中心として発展してきた木質構造用材料。

今年の 9 月 6 日には、オーストリアから「平和の炎」のモニュメントが送られて来て、平和の聖地・桂浜に建てられることになっている。これは日本初である。

坂本龍馬が、「高知県よ、世界に羽ばたけ!、第一コンサルタントも世界を目指せ!」と言っているように思えてならない。

ウィーンでの 3 日間は、素晴らしい仲間にも恵まれ、私にとって本当に良い経験ができた。竹歳誠大使やハプスブルク家の人々、そして日本からウィーンに行かれ、そこで活躍されている人達との出会いは、私にとって大きな財(たから)になった。一昨年は、台湾の李登輝元総統や許文龍氏にお会いできた。「龍馬はすごい」。私の身の周りであり得ないことが次々と起きている。

2014 年 5 月 18 日記